
武士の子

鎬木恵梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武士の子

【Nコード】

N3625C

【作者名】

鏑木恵梨

【あらすじ】

父は切腹、御家は断絶、母は病で急死。残された兄弟に課せられた使命は、父の仇討だった。

一、家名断絶

『家名断絶』の下知があったのは、季節はずれの暖かい風吹く小春日和の午後。

病がちの母は無理に床を離れ、城からやって来たという青年にただ頭を垂れた。我々兄弟は、その光景を母の背中の後ろから眺めていた。

その夜、母は幼い我々兄弟を正座させ、懇々ところ諭した。

「よいですか。私たちは、お殿様から家名断絶を申し渡されました。これからは世を忍び、どんな艱難辛苦にも耐えて、生活をせねばなりません。ですが、あなたたちはお父様の子です。れっきとした武士です。うらぶれた長屋に住み、町人と暮らしながらも、決してそのことは忘れてはいけませんよ」

武士の子である、という言葉は、母が最もよく使った言葉だった。いたずらをすれば「武士の子」、泣けば「武士の子」、学問をさぼれば「武士の子」、近所の女の子をからかえば「武士の子」。

そのうち、我々兄弟が一番嫌いな言葉は「武士の子」になった。

長屋に移り住んで数年、お城のお殿様が亡くなった。

我々兄弟の生活には、なんら損益ないはずなのに、なにが悲しいのか母は数日ほどさめざめと泣き続けた。

その間、風ぐるまづくりの内職がたまっていた。このままでは食べ物か底をついてしまう。父の遺品である甲冑や兜を売っぱらえばいい。そう思ったが、重かったし、第一母が時々磨いている姿を見かけたことがあるのであればやすいと思い、あきらめた。

仕方がない。風ぐるまは我々兄弟でせっせと作った。毎日作っているところを見ていたから、そんなに難しくない。寝込んでいる母の代わりに風ぐるまを届け、銭とあめ玉を貰った。

母を助けていいことをした。

そう我々は思ったのだが、予想に反して母は「武士の子が情けない」と顔をますます青くして泣きいってしまった。

そんな母も長屋暮らしには精根尽き果てたのか。ある朝、我々が目覚めると、涙に濡れたせんべい布団の上で母は冷たくなっていた。我々は泣いた。

最初はしくしく、そのうちわんわんと泣いてるうち、隣の世話焼きばあがとんできて、

「おお、かわいそうにかわいそうに」
べたべたひつついてきた。

しわくちやのばあだ。悲しいのも忘れて、気持ちが悪くなりかけた。

けれど、我々ではこの先どうしていいか判別つきかねる。世話焼きばあはばあで、とりあえず味方になってもらった方がいい。突き飛ばしたいのをこらえ、なるようにまかせた。

案の定、世話焼きばあは役に立った。ばああは旗振りで、近所の人に坊さんの手配から家の整理までを万事やってもらって、しかも食べ物も近所の人が持ち込んでくるので、大いに助かったのだった。

ひととおり家が片づいて母が骨になり、途方に暮れているところで、今度は長屋の差配をしている強欲じじいが我々の元へやって来た。

賃料の請求だろうか。

我々は身構えたが、強欲じじいは無理に好々爺の顔をつくって、尋ねてきた。

「おまえたちは三年前、『御家名断絶』となった、アレなのかい」
我々兄弟は『家名断絶』の理由など知らない。

だが、確かに父はお役人でお城に登っていたらしいし、若いお役人がやってきて『家名断絶』を申し渡しに来たことは覚えている。そんな諸々のことを、かくかくしかじかと話してみた。

「おお、やはりなあ！」

強欲じじいは顔をほころばせ、がしがしと我々の頭を乱暴になでた。この光景を母が見たら、怒って泣くだろう。「武士が町人に頭をおさえられるとは」と。だが、

「町役に話をしておいてやろう。きっといいように取りはからってくれるに違いない」

と言っているじじいの機嫌を損ねるのは、得策ではない。

二、御免状

数日もしたら、このせせこましい長屋にどかどかと四、五人、武士が入り込んできた。

「おまえたちが三年前、『御家名断絶』となった……」

我々は頭を下げるかどうか一瞬迷ったが、目を見返してはいと答えた。

その武士が言うことには。

我々兄弟の父は先に死んだ殿様の側用人を斬ろうとして、逆に斬り殺されたそうだ。悪いことにその側用人とやらは殿様のお気に入りだった。喧嘩両成敗とはならず、我々の家は『家名断絶』、側用人はおとがめなしとなってしまうたそうだ。これには不満をもつ人も少なからずいたけれど、殿様のご意向なので逆らえずにいたそう
だ。

やがてその殿様が死に、新しい殿様になった。くだんの側用人は、新しい殿様のお気に入りになって代わられ、江戸詰にまわされたという。

「そなたらの父上は奴に殺されたのだ。『武士の子』なれば当然、仇討はしような」

我々兄弟は、顔を見合わせた。そして声をそろえて返事をした。

「仇討、しとうございます」

するといえ、なにかと世話をしてくれそうだった。だが断つたら、てのひらを返すような態度をとるだろう。目の前の武士だけじゃなく、強欲じじいも、世話焼きばあも。やっかいなことだが仕方がない。

幸いな話、その「元」側用人は剣術武芸はそこそこできる、という。今の我々では手出ししようがない。しかし対策を立てればなんとかなる。今すぐ行けと言われることもない、ちょうどいい程度、といったところか。上々だ。

我々兄弟はとりあえず剣術道場に通うことにした。才能のある方はさらに剣術をきわめ、ない方は学問を修めよう、そう我々兄弟は決めた。我々は二人である。兄弟そろっていろいろ長じる要もない。どちらか一人が何かに優れていればよいのだ。

剣術道場はお城に登っている武士が通っている。

我々兄弟は、その大半から同情の眼差しを受けた。

「来るべき仇討ちのために、精進し、いつか宿願を果たしてみせる」
そう挨拶したからだ。

これは我々兄弟が事前に相談していた言葉で、近所の連中に話したら感動して涙をまなこからあふれさせていた。しよせん、町人だろうが武士だろうが変わりはない。

時には長屋暮らしだからと、同じ年くらいのばかに冷やかされたことがあったが、そのときは、そのほかのほうがみんなに嫌われた。師範も目をかけてくれたから、よく忠告や指導もしてもらえる。数ヶ月すれば、どちらに剣術の才能があるのか、めどがついた。つぎに我々兄弟は。

今度は同じ道場に通う武士で、学問もよくできて「切れ者」という噂の人に近付いた。「学問を学びたい」と言って「仇討ちに学問がいるのか」と返されたら、困る。我々が一晚考えた理由は、こうだった。

「仇は狡猾な男と聞く。ならば剣の腕だけを磨くだけでは、仕損じらと思う。必ずや討ち果たすためには、頭も良くなければならない」

切れ者の男も、子供の健気な考えをその鋭い頭で斬り捨てるつもりはないらしい。大いに頷いて、学問所を紹介してもらった。

かねての計画通り、一方は剣術を専ら学び、一方は学問に力を注ぐことになった。

そんなある日のこと。

神経質そうな顔の青白い武士が道場にやって来て、
「殿よりのありがたき思し召しである。拝して受けよ」

とうやうやしく、「下」と大書された紙を見せびらかした。

『仇討御免状』

書面には、そうあった。

我々兄弟の名が、仇の名が記されていた。

「そなたたちの仇は江戸におる。必ずや此奴を討ち、その血を注いで亡き父母の御霊を慰めてやるのだぞ」

「必ずや、仕留めてご覧にいきます」

青白顔は大きく頷いて、

「万一、仕損じることがあっても『武士の子』として名を辱めることのないように」

我々兄弟は不快感をおぼえながらも、肯、と答えて青白顔を見返した。

正直なところ、もう少し腕を上げておきたかったのだが仕方がない。そこはものは考えよう。まだ前髪がある方が相手は油断するかもしれない。

我々兄弟は年齢はもう元服する頃だが、元々童顔だからそんなにおかしくもないのだ。

青白顔は元服を済ませてから行くかと提案していたが、我々兄弟は断った。

さて、江戸表に発つ前日の夜のことだ。

隣長屋のおてんばで有名な娘が忍んできた。同年代ではただの小うるさいあねごだが、大人達は器量よしと認めている。

「あいつは将来、どこぞの店の旦那の妾にといわれかねん」

そういう点だけは、大人の意見は正しい。

我々兄弟とこの娘、同衾で数刻を過ごした。なかなか良い。我々兄弟の記憶の中で、心から楽しかったのはこのことくらいだろう。

三、仇討

長屋暮らしが板に付いている我々は、やはり江戸でも長屋を根城にした。

子供だから住まわせられない、と長屋の差配のじじいがごねた。が、金枚をてのひらにのせてにこりするとすぐ引き下がった。江戸の方が、強欲じじいは強欲だ。

我々は藩の下屋敷を訪れた。来る途中で「武士の子」らしい服装に着替えている。

下屋敷の武士たちは、我々のことを知っているらしい。ころよく、我々の仇のことをいろいろと話してくれた。その話によると――

「元」側用人は、江戸には追放されたかもしれないが、院さま、つまり先の殿様の御正室で、今の殿様のご生母にも気に入られていた。だから、江戸では院さまの後押しで、羽振りがいい。今晚も、吉原あたりの太夫と派手にやってるのだらうよ！

だとか。

吉原とはどこか、とその武士に聞いたら、そいつは「子供のいくところじゃねえ」と顔をゆがめて笑っただけだった。

隣のヤブ医者に聞いたらすぐわかった。だがそこへ行きたいという、冗談じゃない、俺のふところは空っぽだ、一回数十両は飛ぶんだぜ、と首をぶんぶん振った。

我々兄弟は口々に、

「この町人姿は世を忍ぶ仮の姿である」

「父の仇を討つために江戸に来た」

「仇を討たねば、父上母上の墓に参れない」

「今、仇は吉原にいる」

「ゆえに吉原に行かねばならない」と訴えた。

このヤブ医者はずぐにむせび泣き、わかった大船に乗ったつもり

でいろうと、胸をどんとたたいて咳きこんだ。正直者だ。だまされやすそうだ。だから長屋でヤブ医者なんてしているのだ。

まあ、ヤブ医者の酒の弱さはこの数日で知っているし、我々兄弟は酒など飲まない。軍資金だって江戸へ出る前に貰った下賜金や餞別がある。なんとかなるだろう。

ともあれ吉原への渡し小舟はできた。

いざ、吉原へ。

接待に出てきた遊女はかむろあがりのちんちくりんの格下で、いかにも安そうだった。ヤブ医者のふところの程が知れる。

ふと、郷里の隣長屋のおてんば娘の裸体と印象がだぶった。不覚にも我々兄弟共々、少々狼狽した。顔はまったく似ていないのだが不思議なものだ。

しかし我々のもじもじする様子を眺めていた遊女は、なにを間違ったか、我々を初々しい弟のように感じたものと思われ、かえって扱いが良かった。我々は吉原に味方を作ることができたようだ。

運のいいことに、仇はこの店の常連客であるという。だが、仇討兄弟の噂は耳にしているとみえ、最近では疎遠であるそうだ。少し機会を待たねばなるまい。

本日のところは、世間というほどの出費はなかった。

あまりにヤブ医者頼りというのも不義理であるから、我々は内職を得た。風ぐるまづくりだ。

少し、母の顔を思いだした。だが次に「武士の子」という言葉がよみがえり、忘れようと努めた。

また、ヤブ医者に取り入っているんな薬について教えてもらった。ヤブはヤブだが、さすがに学問はあるようだ。薬だけはいろんなものを持っている。それに学問も教えて貰うことになった。郷里で学んだ儒学ではなく、実学というものだそうだ。

そんな暮らしをしながらも、我々は幸運にも、五度目の吉原通いで仇と出くわした。

いつものちんちくりん遊女が知らせてきたのだ。

丁度隣が空き間ということで、我々兄弟は忍んで盗み聞いた。

「参勤交代で殿が江戸に参る」

「こんど、あたらしくお殿様になった方でしょう、連れてお参りやんせ」

「わしは殿のおぼえがよくない。本国に戻らねばなるまい」

「つれないかたでありんす」

「おお、かわいいのうかわいいのう」

うんぬんうんぬん。

困る。本国に帰られては困る。

ここが勝負の決めどきではないか。

我々兄弟はかの格下遊女に頼んで、仇に一献の差し入れをした。そこにはヤブ医者のところから盗んできた薬を入れた。しびれぐすりというものだ。悪いところを斬りとるとき、使う。感覚がまひするのだ。

我々兄弟の仇はいったん固辞しつつも、結局は嬉しそうに呑んだ。我々はその光景を見届けると、仇の駕籠の形態を確認し、吉原をあとにした。

そして「武士の子」らしく袴に着替えた。ひとり父の刀、ひとり父の脇差を持った。たすきを掛けた。『仇討御免状』も忘れてはいけない。

冬の往来は寒く、冷える。我々は小走りに走ったあと、吉原の外門で飛び跳ねていた。

先ほど確認した駕籠がやってくる。

我々は声をそろえて名乗りをあげた。『仇討御免状』も掲げた。駕籠かきはさっと後方へ退いた。『仇討御免状』を掲げる者に仇以外の者が手を出してはならない。

仇は、余程重篤な病の床にある以外、どんなときでも逃げてはならない。武士の面目に関わる。吉原帰りで酒としびれぐすりに酔っ払いようが、理由にならない。受けずに逃げるは恥の上塗りだ。

駕籠から這い出した仇はふらふらだった。薬が効いている。抜い

た刀の切っ先もふらふらだ。

我々兄弟はとつと「いざ」と叫んで、斬りつけた。突き刺した。もとどりをあげ、「討ち果たしたり」と、駕籠かきに向かって感涙にむせんでみせた。

四、御家再興

我々兄弟の長屋に駕籠が到着した。駕籠の主は江戸家老と名乗る、いかめしいじじいだった。じじいは口をもごもご動かしていたが、おそらくこんな事を言ったのだと思う。

「父の仇討、よくぞ果たした。九泉の父母も喜んでおろう」
「はい」

我々兄弟、口をそろえて拝謝した。これも我ら兄弟で相談して決めたことばだ。

「第一は『仇討御免状』を下された殿のおかげである」

「第二は、我々兄弟に剣術を指南し、学問を授けてくれた師のおかげである」

「我々を励まし江戸に送り出してくれた藩の方々、江戸にて我々にご教授下さった下屋敷の方々のおかげである」

世にも神妙な心がけである、後日殿より御沙汰があらうから、楽しみにしているように。家老のじじいは相変わらずもごもごと言って、帰っていった。

後日。

我々は殿の側にいた。小姓役にあがることになった。元服親は江戸家老である。

御家再興は、言葉どおり果たされたのだった。

殿は我々兄弟にこう言った。

「実は、母上があの子を気に入っているのでみだりに処分を下すことも出来ず困っていた。そこへそなたたち兄弟の話を耳にし、これなら公然と彼の子を追いつけさせる名目が出来たと喜んだのだ。本当に始末までしてくれるとは思わなかったが」

「父の仇を討つことが出来たのは、殿のおかげでございます。生涯、このことを忘れず忠義をつくします」

殿はそうか、と顔色を晴れやかにしていた。

我々兄弟は殿のおぼえめでたく、将来も期待された。江戸家老も国家老も一目置く存在となった。

一年もすると、殿の帰藩がゆるされ、我々も殿に従って国に戻った。

国元の家は新たに殿から賜った。現在の扶持に加え、今後我々兄弟が就くであろうお役目を考えると、かつてわれわれ一家が住んでいた家でも小さすぎるからだ。

だが父母の遺品はまだ、あの貧乏長屋にある。仕方なく長屋に足を向けた。

世話焼きばあはまだ生きながらえていて、またしても我々兄弟に世話を焼いてきた。我々は小者をつれて来ていたのだが、その小者さえも指図をしていたくらいだ。小者をくるくるまわすと同時に、そのしわしわの口をひっきりなしに動かして見せた。

ばあはの話によると、例のおてんば娘はどこから拾ってきたものか、子をはらんだそうだ。娘はだれの子かは頑としていかなかった。そして、言わぬままに、産褥熱で母子とも死んでしまった。

我々は互いに首をかしげた。

「おれたちの子かな」

「どちらの子だろう」

「知るもんか」

どちらにせよ、あのおてんば娘はいないのだ。

我々は安心して、新しい屋敷に戻っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3625c/>

武士の子

2010年10月8日15時56分発行